

車窓を楽しむ鉄道の旅 その16 関東鉄道竜ヶ崎線の旅

<1> 常磐線龍ヶ崎市駅の歴史

明治33年(1900年)に常磐線の前身である土浦線の佐貫駅として開業した。開業時には稲敷郡馴柴村の字地名「佐貫」が駅名になった。のちに土浦線は国有化されて、1909年(明治42年)に国鉄常磐線となった。佐貫駅からはもうひとつ竜崎鉄道が竜ヶ崎まで走っていた。のちに鹿島参宮鉄道の一部となり、常総筑波鉄道と合併して関東鉄道という社名になった。現在の路線名は、関東鉄道竜ヶ崎線となっている。

当初計画では、竜ヶ崎と常磐線藤代駅とを結ぶ馬車鉄道だったが、小貝川を渡る橋梁工事の難しさから計画を変更し、平地を一直線に走る現在の路線(佐貫・竜ヶ崎間)とし、蒸気機関車による運行で始まった。佐貫駅から竜ヶ崎駅までは4.5Km、軽便鉄道としていくつか駅があったが、現在は始発・終点を合わせて三つの駅が置かれている。

昭和29年(1954年)に稲敷郡龍ヶ崎町は、馴柴村を含む近隣の町村と合併して龍ヶ崎市となった。そして令和2年(2020年)に常磐線の佐貫駅は「龍ヶ崎市駅」と改称された。この駅を起点とする関東鉄道竜ヶ崎線では改称を行わず佐貫駅がそのまま存続することになった。関東鉄道竜ヶ崎線の終点は「竜ヶ崎駅」なので、始発の佐貫駅を、常磐線の改称に呼応して「龍ヶ崎市」にすると混乱するのは誰にでも想像できる。

しかし他所から来た者の目で見れば何とも不思議な「龍ヶ崎市駅」である。

「上野から常磐線に乗って龍ヶ崎市駅で降りて関東鉄道竜ヶ崎線に乗り換えて下さい。関東鉄道の駅は佐貫です。終点の竜ヶ崎で下車して下さい」という難解な案内をしなければならない。

<2> 関東鉄道竜ヶ崎線の旅

「龍ヶ崎」という地名の由来が気になり、一度行ってみたいと思っていた。前述の駅名改称によりおかしなことになってしまったことを知ると、どうしてもこの目で確認してみたくなり、出かけてみることにした。

5月22日10時すぎに家を出て八千代台駅へ、そして船橋へ。船橋から東武野田線(アーバンパークラインと言いたい)に乗り30分ほどで柏へ。柏から常磐線に乗り換えれば20分足らずで龍ヶ崎市駅に到着。

立派な駅前広場には「龍」をあしらったイラストや飾り付けと「りゅう」「たつ」などの言葉を織り込んだキャッチコピーが散見する。郊外の駅でよく見かける大規模商業施設はここには存在せず、至って物静かな駅前風景。

正午を半時ほど過ぎた頃で、空腹を治めるのが急務の状況だったが食堂のようなものがあまり見つからない。ここまで来てコンビニのパンではつまらないので、駅のすぐ隣にある蕎麦屋に飛び込んだ。高曇りで気温は思ったほど上がらず、やや薄めの服装で出かけた上に電車の冷房で冷えた体には温かいそばが丁度良かった。

龍ヶ崎市駅東口の線路脇の路地のような通路に関東鉄道の佐貫駅を示す案内表示があった。時刻表を見ると一時間に2本の運行のようで、30分弱の待ち合わせということになった。駅前の案内所で駅周辺の地図を手に入れて、予習をしながら時間を潰した。

12時50分発の竜ヶ崎行は、一両だけのディーゼルカー。座席について上を見上げて驚いた。すべての吊革にコロケを模した飾り付けが付いている。先ほど手に入れたガイドマップを見たら「コロケで町おこし」と書いてあったが、やや胸焼けしそうな景色だった。

発車時の轟音は今や首都圏では物珍しい存在になってしまったが、前後左右に起伏のある景色が全く見えない関東平野の大平原を走る住民の足にはこの音が一番マッチしているように感じる。長い編成の列車だとレールの継ぎ目の音が半サイクル程ずれていくつもいくつも余韻と輪唱のように連なっていくのが楽しい。かたや一両編成だと「カタン・カタン・カタン」と単音の響きが静かに繰り返されて、流れ去っていく車窓の景色と相まって特別な空気を作ってくれる。

住宅地の間を縫うように走ると、少しずつ緑が増えてくる。途中に「入地(いれち)」という駅があるが、文字通り「土地の起伏が入りくんだ谷あい」なのだろうか。地形図を見ると海拔4~6mほどの小さな膨らみが細長く伸

びる地形になっている。それとも幕府直轄地の「入地(いりち)」が由来なのだろうか。

次は終点竜ヶ崎駅。4.5Kmの竜ヶ崎線の旅は、車窓を楽しむ間もなくあっという間に終わった。

<3> 龍ヶ崎という地名

龍ヶ崎市のホームページに地名の由来についての説明が載っているが、諸説あり定説は不明らしい。

- 由来説①: 鬼怒川(毛野川)・小貝川(蚕飼川)・常陸川などが合流する葦の平原で、古来竜巻が多かった。
- 由来説②: 北総(千葉県)にある伝説、干ばつに苦しむ農民の禱りを聞いた龍が女に化けて現れて。雨降りを約束した。女が立ち去ると雨が降り出して、七日後に巨大な龍が三つに裂けて地上に落下してきた。落ちた場所に龍角寺(栄町)・龍腹寺(印西市)・龍尾寺(匝瑳市)の三寺が建てられて手厚く葬られた。龍が落下した所の先にある地点だったので「龍が先」と言われた。(後日譚的こじつけのような感じがする)
- 由来説③: 現在龍ヶ崎一高が建つ高台の突起から長く尾を引くように伸びる稲敷台地の形が、龍が天に昇る姿に似ていることから地名が誕生したという説。これは江戸時代の「新編常陸国史」に記されているらしい。江戸時代に龍ヶ崎という地名が存在したことの証明にはなるが、それ以上昔のことはわからない。
- 由来説④: 源頼朝の信が厚く、常陸国南部の地頭職を任された下河辺政義(しもこうべ まさよし)の家臣である龍崎氏が室町時代(応永年間)に在地地頭をしていたことによる。領主がその地の地名を自分の名前とすることが多かった時代だが、この時代以前には龍ヶ崎という地名が残っていないので、領主の名前を取って地名とした例かもしれない。どことなく信憑性を感じはするが、確たる証拠物件は見つかっていないらしいので何とも言えない。

昨今の気象情報や災害関係の情報を見る限り、この地は竜巻が多く発生しており、川の氾濫による被害も過去に何度も経験している。渇水や溢水などの水にまつわる天災と竜神信仰との結びつきは各地に存在するし、「竜巻」が地名の由来に絡んでいるという説もありうる。この場合は、「由来不明」である面白さに留めておく。

<4> 龍ヶ崎散歩

そば屋で昼食をすませた後、竜ヶ崎駅周辺を少しばかり散策してみることにした。

竜ヶ崎駅を出て大きな五叉路の交差点の右側に立派な屋根が見えたので入って見たら、門柱に「米薬師」と刻まれていた。人気はなく堀もほとんどなく、どこからでも入ることができる。

本尊の薬師如来は行基の作で、加藤清正が守護神としていた。慶長10年(1605年)に清正の家臣だった浪人が剃髪し諸国行脚の途中でこの地に立ち寄り、堂宇を建てて薬師如来を安置したのが始まりとされている。米三粒に霊水を含ませて呪文を唱えると病が快癒したことから「米薬師」の名が付いて信仰された。

天正19年(1591年)豊臣秀吉の領地替えにより、常陸国河内郡・信太郡の26ヶ村は仙台藩伊達政宗の所領になった。河内郡龍ヶ崎村に陣屋を構えて代官が配置され、治安維持のため番屋も置かれた。

伊達家は薬師如来信仰だったので、この地の東西にある薬師堂を守護神として崇めた。

駅の北東にある般若院は、天元元年(978年)に道珍法師によって創建された。正式名称は天台宗金剛山観仏寺で、伊達家の代々の位牌所になっている。

市役所の北側にある愛宕神社は、寛永18年(1641年)に伊達政宗の子忠宗が、京都の愛宕神社を勧請して創建した。伊達政宗の影響を受けた土地であることもわかった。

米薬師の前の交差点を渡って、駅から南東に一直線に走る道は「商店街大通り」と名が付いている。

電柱に記された町の名前は「米町」。今は閉店してしまった店ばかりが並び、淋しい大通りになっているが、かすれた看板や痛んだ軒先を注意深く眺めて見ると、人々の暮らしがこの商店街で営まれていたことがよくわかる。和菓子屋の先に八百屋、その隣に酒屋があり、その隣には陶器屋ある。その先には……。

路地裏に入ると、迷路のように曲がりくねった細い道が民家の間を走っている。ほとんどの道は車が通れない細い道で、人々の暮らしが「歩き」で成り立っていた時代を感じさせる。

路地のあちらこちらに小さな緑の木立があり、木立を目当てに歩いて行くと石の祠や朽ちかかった小さな祠を見つけることができる。

路地を何度か曲がったところに竹駒稻荷があった。大きな二本の楠木に挟まれて建っている壊れそうな小さな堂宇、二本の立派な赤い幟。二本の楠木は御神木で樹齢250年とのこと。竹駒稻荷は宮城県岩沼に本社がある神社なので、伊達政宗が持ってきたものではないかと勝手に想像してみた。

蛇のようにうねうねと走る路地の一角に頼政神社と書いた石柱が建つ空間があった。フェンスとフェンスの間の幅1m足らずの通路を進むと石柱の五分の一程度の小さな石の祠が置いてあるだけの、神社と名乗っても良いのかなと疑ってしまうような神社である。

源頼政は、保元・平治の乱を経て平氏の政権下に留まり、平清盛の信が厚かった。

その後、平氏と後白河院政との間のいざこざから、治承3年(1179年)平清盛は挙兵してクーデターを興して、高倉天皇を譲位させた。そして高倉天皇と清盛の娘徳子との間にできた安徳天皇(3才)を即位させた。

これに不満を持った後白河法皇の第三皇子以仁王は、法皇の妹(八条院)の養子となって皇位継承の系を結んだ。平頼政は以仁王側について、平氏打倒の旗を揚げた。

しかし、平氏の猛攻により宇治川の決戦で敗退して自害することになった。自害する際に家臣である下河辺行吉に、自分の首を東国へ運んで葬るように言い残した。

鎌倉時代に入り下河辺氏が一族の守護神として、龍ヶ崎に(この時に龍ヶ崎という地名があったかどうかはわからないが)頼政神社を建てて祀ったと言われている。

その結果、この地では地元の守護神として崇め、産土神としても機能したと言われている。

神社ができた頃、周囲は田圃だったらしいが、のちに宅地化が進み人里の中に埋没するような形になった。

頼政神社を抜けて市役所方面へ抜ける路地を歩いていたら、広い墓地が現れた。塀の上に乗る手作りの看板に「しぶくり卵塔」と書いてあった。覗いて見たらあまり人の手が入っていない墓地ではあるが立派な墓石が目立つ。元は大統寺の墓地だったが、幕末の頃に民間の墓地になったらしい。鎌倉時代に禅僧により中国から持込まれたと言われている卵塔は、現在は存在しない。小道を挟んだところにある堂面墓地には卵塔が一基あるので、過去には存在した可能性が高い。源頼政と関係するのかもしれない。

路地の途中に一軒の大きな家が解体・撤去された空き地があった。家がなくなり剥き出しになった地面の起伏を細かく観察すると、度重なる洪水で積み重なった土砂でできた土地であることが想像できる土の表情だった。

<5> 下河辺氏を洗ってみる

前述の「龍ヶ崎の地名の由来」の中に出てくる、「下河辺氏」と「龍崎氏」の存在が気になって、帰宅後に「鎌倉武家事典」で調べて見た。

天慶2年(939年)の天慶の乱で平将門を破った藤原秀郷は、その功により下野・武蔵両国の守に任じられて鎮守府將軍となった。藤原秀郷の五代あとの行政の子である政光は小山氏を名乗り拠点を小山荘とし、もう一人の子行義は下河辺荘を拠点として下河辺(しもこうべ)を名乗り、行平に受け継がれた。小山政光の三人の子らは、小山氏・結城氏・長沼氏を名乗り、いずれも源頼朝に仕える御家人となった。

下河辺行平は千葉常胤とともに上洛し、京の群盗による不安定な状況を治めるなどの功もあり、源頼朝の信はかなり厚かった。建久6年(1195年)の資料の中に「下河辺行平の子孫を源氏一族に準ずることにした」という頼朝の意向が記されていることがわかった。

久喜市や野田市の歴史をまとめた資料をweb上で調べて見たら、「下河辺荘」について記されていた。

下河辺氏の始祖である下河辺行義は、下野国の有力な在庁官人であった小山政光の弟で、下河辺庄司と名乗った。下河辺荘は栗橋・鷲宮の東端に迫り、古河、野田を含み、香取神宮信仰が中心にあったことなども解っており、常陸国南部や下総国北部にまで及ぶ広さだったらしいので、龍ヶ崎一帯は下河辺氏の支配下にあったことがわかった。源氏の信頼も厚く要職に就き、荘の日常の管理は家臣に任せていたのかもしれない。

千葉介の系譜を見ると、13代千葉介(氏胤)が若くして美濃で病死し、息子の竹寿丸が幼くして家督を継ぐことになった。竹寿丸はのちに14代千葉介満胤となるのだが、幼時の補佐人として浄心という僧侶が登場し、後見人として龍崎尾張守の存在も記録に残っている。龍崎氏に関する情報はこれだけだったが、下河辺氏の家臣として影響力を持っていた時代があり、様々な農地改革などの事業も行なったらしい。龍ヶ崎の地名の由来に関係している可能性がありそうな気もしてきた。

<6> 地形図から龍ヶ崎を考える

国土地理院の地形図や古代の地形図を眺めて見たら、見えてくるものがあった。5000年前の推定地形図によれば、牛久沼を含む龍ヶ崎一帯は海だった。現在のような地形になってからも、鬼怒川や小貝川の溢水、その影響を受けた牛久沼の水位の変化による浸水などなど、龍ヶ崎周辺の平地は常に洪水や濁水の影響を受けてきたようだ。頻繁に流路が変化してきた川は、現在の地形図からも読み取れる。平野の北側には海拔 20m 台の稲敷台地が広がり、平野の中の海拔 5m 前後の僅かな起伏の部分に人々は住んでいた。それ以外の場所は、海拔 3~4m 程度の湿地帯で、水田耕作が命綱の農地だったのかもしれない。牛久沼の水位調節用に作られたポンプや、沼と小貝川を結ぶ八間堀と言われる調整用水路、水田地帯を横切る江川・大正堀川などの水路そしてくまなく巡らされた農業用水路と論所排水などの排水路。江戸時代には農民同士の水の争いが絶えず、貞享4年(1687年)に幕府に訴える事件が発生し、江戸町奉行・勘定奉行らの署名による「龍ヶ崎村水論始末書」なる文書が残されているとのこと。その後も小競り合いは時々再発していたらしいが、昭和30年代になって大規模な区画整理や灌漑事業が進められて現在の農地環境になった。「土地改良記念碑」や中心人物の顕彰碑などの石碑が多いのはこんなことが背景にあるようだ。現在は高台に宅地開発が進み新しい町が造成されているが、龍ヶ崎は「水との戦いの歴史」だったのかもしれない。

以上

